

研究調査報告

# 海外神社跡地から見た景観の持続と変容 台湾における海外神社跡地調査

津田 良樹  
(非文字資料研究センター 研究員)

## はじめに

2013年3月7日～3月11日にかけて台湾において海外神社跡地調査を行った。調査内容は大きく2つに分けられよう。台湾師範大学蔡錦堂先生にご案内をお願いしておいた調査の一日(8日)と研究協力者の金子展也氏と私で動いたその他調査である。

## 地下神殿を持つ新化社調査を中心とした一日

8日の台南市の調査は台湾師範大学蔡錦堂先生にご案内をお願いしておいたため、充実した一日となった。地元新化鎮の文化財研究グループが調査に参加され、当時、蔡先生のもとに留学中であった本センター大里研究員も同行された。その日一日の行程は、①那拔林神社、②新化社、③奉安殿(新化鎮)、④林百貨店神社、⑤昌南社(専売公社)、⑥第二連隊営内神社(成功大学光復キャンパス)、⑦三崁店社であった。これらのうち『神道史大辞典』付編の神社リストに収録されているものは②新化社と⑦三崁店社のみである。奉安殿が残っているのも珍しいが、その他の神社は軍の営内や企業内神社や一般に公認されていない神社であり、通常では発見することが難しい神社も含まれている。

那拔林神社は、町場の小さな神社であったようだ。前方にコンクリート製の階が取り付く、1.2m×1.2mほどの石垣基壇および、基壇中央付近に本殿の亀腹と思われる石が残る。しかし、その上には後世の神社とは無関係な石碑が建っている。本殿は残っていないが、かつての様相を想像することが充分可能な遺構である。

新化社跡は虎頭埤風景区(公園)となっている。公園と住宅地との境界には大きな鳥居や神橋が今も残っており、10年ほど前に湖の底から見つかったといわれる「新化社」と石に刻まれた社号碑も立てられている。石段な



写真1 新化社の社務所地下に造られた地下神殿崖面からの入口



写真2 新化社地下神殿の内部。正面の階段は元の社務所につながる。一方、左側は崖に口を開いた開口部である。壁・天井を仕上げていた漆喰はほとんど剥落しているが、壁・天井境の入隅を回縁代わりに装飾的に塗り廻したコーブなどに一部漆喰が残っている。

どは残るが、主要部の社殿は残っていない。それでも、元の参集殿だと思われる建物が今も売店として使われている。特筆される点は元社務所の地下にあたる位置に地下施設が設けられている点である。地下施設は階段で地下に至るルートのほか、崖地に造られており、その崖面にも出入口が設けられている。内部は、かつては天井や壁面を漆喰で塗り廻すなどの仕上げがされていたようだ。この地下施設は御神体を避難させる防空壕ないしは地下神殿と思われる。このような地下施設は台湾神宮にも造られていることが判明している。また、旧満洲国皇帝の帝宮内にあった建国神廟や中国本土の南京神社などでも確認しており、太平洋戦争の末期に造られた神社に



写真3 林百貨店屋上の林百貨店神社は百貨店建物とともに修復され保存・公開されるという。



写真4 仁福稲荷社の戦後増築された覆屋内に、木造の一間社流造本殿が今も残る。

多いようだ。何の目的で造られたのか、現時点では特定できないが、いずれにせよ興味深い施設ではある。

林百貨店神社は林百貨店の屋上に造られた企業内神社である。日本統治時代の台南に造られた林百貨店は梅沢捨次郎の設計で、台南唯一の近代的エレベータを備えた5階建ての鉄筋コンクリートの建物であった。そのビルが復元修理され、屋上にあった神社部分も本殿はないが、石灯籠や笠木などが取り去られた状態の鳥居なども修理され、一般公開されることになったようだ。日本統治時代に日本の資本で造られた百貨店ビルおよび神社を修理し、公開するという台湾人の精神構造も興味深い。

三崁店社は台湾製糖株式会社三崁店製糖所によって昭和6年に造られた企業内神社である。かつての工場の様子を示すものは現在ほとんど見られないが、神社遺構は比較的よく残っている。一段高くした基壇の周囲に人造石の玉垣をめぐるし、さらに本殿の建てられていた基壇が高く築かれている。本殿基壇上には井桁に組んだ本殿の土台が載ったであろうコンクリート製の基礎やそれから突き出したアンカー用鉄筋も残る。また社殿に向かう参道の両脇には石灯籠の下部が並び、手水鉢や狛犬の台ではないかと思われる部位も残る。

### 台湾各地の神社跡を巡った三日間

翌3月9日は台南から高雄を経て旗山で旗山神社を、次いで岡山で岡山神社、さらに仁福稲荷社を調査した。

旗山の中心街路中山路と直行する華中街を西に突き当たった丘上に旗山神社は建っていた。華中街の北側には旗山国民学校、突き当たり南側には武徳館が配された。武徳館は改装されているが、旗山区の文化財として修復保存されている。また、旗山国小にも中山堂（旧礼堂）、旧校舎が文化財として保存されている。古写真によると

武徳館の山側に大きな鳥居があったことがわかる。現在、鳥居はなく、上段、下段の石段があるが、上段の石段は神社時代のものであろう。上段の石段の両側に石灯籠が並んでいるが、これらは近年に復元して置かれたものである。本殿前にも石段があったのではないかと思われるが、新設道路ができており不明である。当然社殿などはなくなり、付近は孔子廟を中心とした旗山中山公園となっている。

岡山神社は岡山中山公園内に建っていたようだ。公園は現在工事中であり、その入口附近に笠木・鳥木を取り去り両柱と貫だけとなり、赤く塗られた大きな鳥居が建っている。社殿がどのあたりにあったのかは不明であるが、公園のなかに岡山寿天宮が建てられており、その建物内にはなぜか神社のものではないかと思われる神輿が飾られている。また建物の周囲には神社時代の石灯籠の部材と思われる石材が無造作に積み上げられている。

仁福稲荷社は高雄市仁武区横山二巷に残っている。小さな神社であるが、石段ばかりでなく木造の一間社流造の本殿が残っている。本殿の前半分から向拝前までを台湾風の覆屋が後世に増築されており、一見日本風の流造本殿が存在するようには見えない。しかし、詳細に見て行くと向拝柱と本殿を繋ぐ海老虹梁があり、その先端部の木鼻には渦の絵様が彫られるなど極めて日本の意匠である。また、台湾風の覆屋の正面側に接するように鳥居が建っている。台湾風に真っ赤に塗られているが、稲荷だとすれば当初から赤く塗られていたのかもしれない。小規模で改造されているとはいえ本殿・鳥居が残っている点では貴重な遺構といえよう。

3月10日は台中を出発し、彰化、清水、苗栗とまわった。彰化神社は私にとっては2度目の訪問である。荒廃しているものの社務所が残っており、その再確認が目的であった。

縦貫鉄路の海線沿いに位置する清水神社は、台中市清水区の現在の清水公園牛罵頭遺跡文化園區に昭和12年に造られた。神社跡地へは前面道路から神社時代の雰囲気を残す288段にわたる長大な石段を登り、さらに左に矩折に曲がるとかつての境内地が広がっている。戦後、境内地は台湾陸軍砲兵隊の清水駐屯地となったが、1997年には軍も撤退した。そのため牛罵頭遺跡文化園區は神社遺跡に軍事遺跡が重なった状況になっている。軍時代に指令台が造られており、その両側に神社時代の石段と狛犬が残る。周囲を囲む玉垣が残るほか、石灯籠の残骸が積み上げられた状態が見られるが、社殿などの面影はない。むしろ兵舎が立ち並ぶ軍駐屯地の様相を示しているといえよう。それでも狛犬台座に「奉納 祝皇紀二千六百年 大甲郡小公学校職員一同」の刻銘があるなど神社時代の痕跡は随所に残っている。

苗栗神社は苗栗市福星里福星山の現在の猫狸山公園の地に昭和13年に造られた。今では羅福星忠烈祠に転用されている。上中下段の石段、さらに本殿前の石段と4段構えの石段があり、本殿前石段を登った奥に東面して本殿が建っていたと思われる。中段の石段を登った両脇に鳥居の痕跡があり、本殿前石垣下に石灯籠の台座らしき石材も残る。そのほか参道の南側一段下がった場所に神社との関係は必ずしも明らかではないが、日本家屋を改造したらしき建物が南面して建っている。

苗栗稻荷神社跡地は苗栗市公所と国立総合大学とによって共同管理されているようだ。苗栗市二坪山砲澤紀念公園内にあり、元の本殿跡附近には日本の一般的神社について解説したガラス板製の説明板が設置されるなど跡地として保護されているようだ。とはいえ当然ながら社殿などは残ってはいない。3段に分かれた石段が残り、下段の石段前には笠木が取りはずされた鳥居が残るほか、中段の石段が始まる両脇には火袋から上は欠損しているもののコンクリート製灯籠も残っている。灯籠には昭和部分が欠き取られ、「十三年十月」部分だけが残る刻銘も見られる。さらに中段上には鳥居の亀腹が残るなど随所に神社時代の遺構の痕跡を確認することができる。

3月11日は台北の郊外に位置する保養地でもある陽明山の清滝神社跡を巡り、台湾神宮跡地の補足調査を行った。台湾神宮跡地では社殿の礎石を確認し、略実測を行った。また、かつての社殿群の区域を確定するための現地検証を行った。



写真5 苗栗稻荷神社跡地。上中下段に分けられた石段等の地形には神社時代の面影を残している。また、石段前には笠木部分が取り除かれた状態の鳥居が今も保存されている。



写真6 苗栗稻荷神社の元の本殿基壇の両脇に立てられた説明板。ガラス板で作られた説明板には苗栗稻荷神社の説明ではなく、一般的な日本の神社の説明がなされている。

## おわりに

以上が主な調査内容である。いずれにせよ、台湾の海外神社跡地は韓国などに較べ神社遺構をよく残している。残っているばかりでなく、積極的に復元し忠烈祠として活用する旧桃園神社などのような例もあるほか、市当局や大学が保護管理する苗栗稻荷神社のような例も見られる。そのほか金瓜石神社のように神社遺構を積極的に利用し観光資源として利用しようとする動きもある。日本人から見れば負の遺産としかみえない神社遺構を消し去るばかりではなく、修復し忠烈祠として活用する例では、反面教師の意味合いが含まれている。とはいえ神社遺構を文化財指定し、保存・活用を図り、それを観光資源として利用するとなると明らかに評価軸が変わろう。戦後の台湾では、本省人と外省人との間の軋れきも大きい。それらも当然関係してくるだろうが、海外神社を何をもって評価の軸にするのか、価値尺度をどのように考えたらよいか。そのような意味からも、台湾人の心理的・精神的な面からの再検討が必要ではないかと考えている。